文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.8, No.1, pp.297～307, 2006.12

保育実践研究センターにおける学生の実習体験について

―利用票分析を通して―

椛　島　香　代*

Key Words: analysis of students' reports, self-learning, speciality of early childhood education

Ⅰ，はじめに

大学における学生指導については近年学問や研究的視点のみでのかかわりでは不十分であることを感じている。講義を通して知識や思索のあり方を伝えるだけではなく，学習方法についての指導，生活指導の占める割合が高くなってきている。教員には様々な指導技能が求められる時代になっている。

保育学科としての特性もある。4年間在籍し必要単位数を満たせば卒業と同時に幼稚園教諭，保育士資格が授与され即戦力として現場で乳幼児保育に携わることが要求される。4年間の学生生活を通して保育実践者として必要な様々な技能を身につけるためには授業の充実を図るだけではなく実習指導の充実も必要不可欠である。実習担当として実習授業シラバスの構築が大きな課題となっている。現在以下の点に留意して授業を展開している。

・学生個々のパーソナリティや学力を把握し個別指導の機会を設ける
・社会人として必要な態度・技能を育てる
・保育についての知識・理解を深め，保育者としての態度・技能を育てる
・職業に関しての知識・理解を深め，適性について学生自らが考察する力を育てる

学生は乳幼児の生の姿にふれた経験が少なく講義だけではどうしても具体性に欠け，実感を持って捉えにくい。実習に入る前に学内においていかに具体的に学習させ観察技能，考察する力を養成するかが課題となる。そこで，学内においても保育実践的経験や指導の場を確保したいとの願いを実現するために工夫を重ねてきた。ふじみ野幼稚園との連携を模索しまた保育実

＊人間学部保育学科

践研究センター「ふらっと文京」を創設した。「ふらっと文京」においては０～２歳の乳幼児を主な対象とし，３～５歳児を対象とする幼稚園とあわせて乳幼児期全体を捉えられるよう配慮した。このことで，保護者とのかかわりも可能になった。

保育実践研究センターは平成16年度から試行段階に入り平成17年度から本格稼動している。その理念・運営については文京学院大学総合研究所紀要（平成16年度・17年度）に詳しいのでここでは割愛する。本稿では，保育実践研究センター「ふらっと文京」を利用した学生指導のあり方について考察していく。

II，保育実践研究センター「ふらっと文京」における学生指導

保育実践研究センター「ふらっと文京」（以下「ふらっと」）は子育て支援と学生指導の二つの機能を併せ持つ施設である。保育にかかわる専任の職員がおり利用者のサポートにあたっている。学生指導のあり方については，ふらっと職員との連携を取りながら様々な可能性を模索しているところである。現在のところ学生は以下のような場面でふらっとを利用して学習している。

① 学生個々が空き時間を利用し“ふらっと”観察・参加する

学生が空き時間に自由にふらっとに来所できるようにしている。１年次にガイダンスを行い，利用の仕方を説明している。ふらっとを利用した時には「利用票」にその日の発見や疑問，自分の課題などを書き提出する。内容によってふらっと職員が学生全体に伝えたい時は掲示板を通して，個人指導したい時はその学生が来所した際に指導を行う。

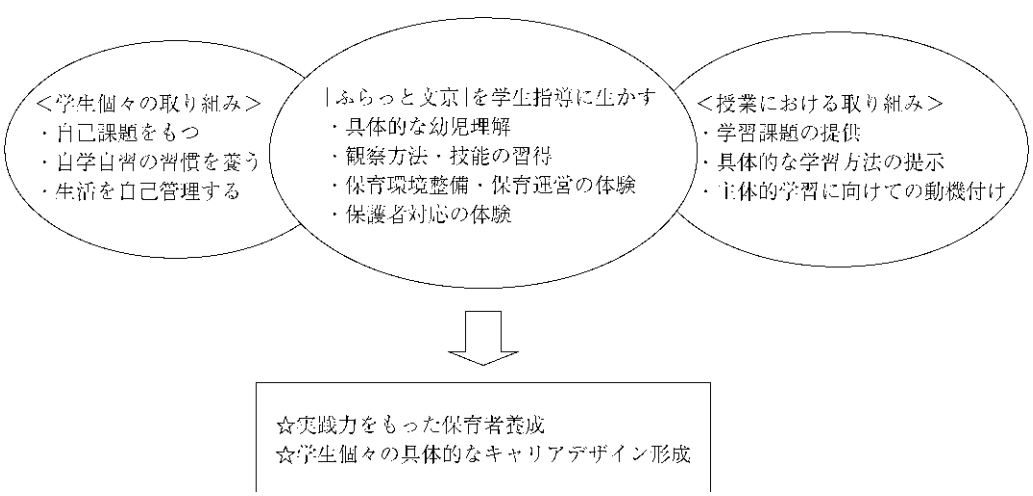

図１ 「ふらっと文京」における学生指導のあり方

② 授業の中で各教員から与えられた課題を持って観察・参加する

授業内で各教員がその専門的視点から問題を提起し学生に課題を与える。学生は空き時間を利用してふらっとにおいて資料収集を行いレポート提出する。授業担当教員によって指導が行われる。

③ 実習の授業の中で観察・保育を実践・検討する

実習前指導において，乳幼児理解，観察方法，観察記録の書き方，実習日誌の書き方，乳幼児・保護者とのかかわり方，環境設定，保育実践，ティームティーチングなど，保育に関連する様々な要素を学年に応じて体験学習する。実習の授業は複数の教員で担当するため少人数指導も行う。提出されたレポートをもとに討論やグループワークを行い更に理解を深めることができるようにしている。また学生個々の状態をきめ細かく把握し，実習施設配当や個人指導にも生かしている。

ふらっとの基本理念は，親子で「ふらっと」，学生が「ふらっと」立ち寄り参加する場でありたいというものである。その点から①の充実が欠かせない。授業や実習で受動的に学ぶだけでなく学生自身が主体的に参加し学ぶ場でありたい。また，保育者は自ら問題意識を持ち，考察し実践し評価する態度が重要である。自学自習が欠かせないのである。大学生活を通して自己課題を持ち自ら取り組む学生を育てる必要がある。利用票を分析・考察することにより，学生の問題意識や学習内容を捉え今後の動機付けや学生指導に生かしたいと考える。

III,「ふらっと文京」の利用方法と利用票について

「ふらっと」を学生が空き時間に利用する場合，以下のような手続きで利用する。

① 学生の印である文京グリーンのスカーフを身につけ，受付の学生用ノートに記名する。

② 学年に応じて優先順位がありフロアで実際に親子とかかわれるのは高学年の 4 年生から優先される。よって，低学年は場合によっては観察室からの観察となる。

③ 「ふらっと」で自由に過ごした後利用票に記入して提出する。

利用票（A4 用紙）には以下の内容を記す。

利用日時，学年，学籍番号，氏名

利用形態―観察（多目的室・フロア），参加，授業（課題）　を選択

自由記述―「今日の体験で気づいたことをまとめておきましょう」とし，観点等を提供することはせず学生にゆだねる

学生はふらっと開設時間帯（月・水・金　9：30～14：45）に自由に参加し利用票を提出するが，提出に関しても比較的ゆるやかにしており「義務」とはしていない。

Ⅳ，利用票分析方法

1，分析の手続き

〈対象〉

平成18年４月～７月のふらっと開設日における学生自由参加による利用票

ふらっとはこの期間40回（月・水・金　9：30～14：45）開設した。

〈分析方法〉

学生の自由記述を取り上げた内容，文章構成の側面から分析を行う。箇条書きの文章はそれぞれについて，一連の文章になっている場合には段落をまとまりとした。分析の客観性を検討するため，多数回来所している学生の利用票を抽出，３人の分析者によって検討し不一致点については討議により決定し，分析観点が一致するようにした。

2，分析観点

①　取り上げた内容

利用した際に学生が一番印象深い内容を記録すると考え，学生の興味，関心の方向を把握するために設定した。

a，乳幼児について

観察による乳幼児及び遊びの理解，自分がかかわって得た情報，保護者から得た乳幼児についての情報

b，保護者について

観察による保護者の実態理解・育児方法の理解・母子関係，自分がかかわって得た保護者についての情報

c，保育について

環境設定，運営，保育者としての援助のあり方

②　文章構成

保育者は，自らの保育を意識化し言語化する必要がある。一般に保育現場においては保育を他者に観察してもらう機会が少ないため，自分の保育をできるだけ客観的に捉え説明できなければ保育者間の保育検討の場が十分に機能しないからである。乳幼児について感覚的に捉えるだけでは不十分であり，自分自身の乳幼児に対する理解や評価の根拠となった情報をどのように得たのか，どういう事実をもとに判断したのかを明確にしようとする態度が重要である。学生は，乳幼児の観察観点の設定，具体的な行動レベルでの観察技術の習得，観察から得た情報の解釈と考察力，援助方法の検討，保育実践の評価などについて学ぶ必要がある。

このような視点で利用票の分析を試みたが，十分に理解しているとは言い難くむしろ行動観察のレベルでも多くの課題が出てきた。よって，学生の観察記述部分に着目して，以下のような分析観点に修正した。

a，事実を観念的に捉え，感想を書く。

b，事実だけを書く。

c，事実を書き，それについて考察する。

d，事実を書き，自分の課題を書く。

e，事実を書き，それについて考察し自分の課題を書く。

V，分析結果と考察

1，学年別利用者数について

学生利用者の学年別延べ人数・利用票提出数は，表１に示すようなものである。実際には，参加していても記名していない学生もいると思われる。3 年生が利用数より利用票数が多いのはそのためであると考えられる。

2 年生の利用が多いのは，空き時間を利用してふらっとに参加し資料を収集するよう授業で課題が出ていたためである。よって，利用票に記入した学生が大変少なくなっている。そのことから考えると，1 ～ 3 年生における学生自身の主体的利用は全体に低調である。授業が多く空き時間の確保が難しいことと，それを踏まえた開設時間延長の事実が周知されていない可能性がある。また，ふらりと立ち寄るには抵抗もあるのかもしれない。今後は利用しやすい雰囲気づくりや動機付けを工夫する必要がある。

授業が殆どなくなる 4 年生は利用が多い。空き時間が増えただけでなく実習体験を積み問題意識を持つ学生が多いことも要因であろう。保育現場とは異なる保護者の存在がある中で乳幼児とかかわるふらっとの特徴を意識し自分の経験に生かそうとする学生もいる。利用票回収率も56.3%で他学年に比べて積極的な利用の状態を示している。自由参加の 4 年生に対する指導のあり方を考えていく必要がある。現在教員やふらっと職員が利用票を読んで個人的に必要と思われる学生に対しては個人的に指導を行ったり，全体に指導したい内容は掲示するなどしているが今後はそのあり方をさらに検討しなければならない。

表 1 「ふらっと文京」学生利用者数

	1 年	2 年	3 年	4 年
利用延べ人数	12	111	7	158
回収利用票数	1	21	8	89

2，利用票分析と考察

① 取り上げた内容について

利用票全体を先に述べた分析観点で分類したところ，表２のようになった。

どの学年も乳幼児について関心が高いことがわかる。この中には，首のすわらない乳児を初めてみた驚き，抱っこした感動，乳幼児とのかかわりの難しさや戸惑いなどの情緒的側面から，遊びの状態分析や発達理論の確かめ，実際にかかわってみて得た体験などが書かれている。

保護者については観察して理解したことよりも，会話して聞いた乳幼児理解につながる内容について取り上げられていることが多い。また，保護者に対してどのようにかかわったらよいか難しさや戸惑いを書いたものも多い。かかわり方を学ぶ機会と前向きに捉える者もあり，学生なりにふらっとの特性を生かそうとしている様子が窺える。

保育については４年生になって取り上げることが増える。実習体験を積み，保育についての理解が進み乳幼児理解にとどまらない環境設定や保育運営，スタッフの動きなどにも目を向ける余裕が出てきているからであると考えられる。就職を間近に控え保育者としての自分自身を積極的に育てたいという学生の動機付けの高さもある。遊びや環境を自分で設定してみて試してみた結果を分析するような内容のものもある。友人やスタッフの乳幼児や保護者へのかかわり方にも目を向けそこから学び取ろうとする態度もみられる。

表２　学生が利用票に取り上げた内容

	乳幼児について	保護者について	保育について
１年	2	2	0
２年	27	13	3
３年	32	4	2
４年	74	49	26
合計	135	68	31

3，文章構成について

文章構成については，今後の指導のあり方を探るため事例をひきながら分析・考察を行っていく。事例の抽出にあたっては各観点の最も端的な例を選択した。尚，誤字，脱字，仮名遣い，言い回し等は原文のままである。

a，事実を観念的に捉え，感想を書く

〈事例１〉１年生

まだ首もすわってないから，２ヵ月半くらいだと思うのですが，頭の方から声をかけたら，目を上にギョロっと向けてくれました。まだ目が見えてる感じではなさそうだし，これはただ

何かが動いたり，音がしたって言うだけの反応なのでしょうか？

〈事例 2〉2 年生

観察をしていて，先輩たちが子どもとかかわるときの対応のしかたや行動がうまいと思いました。

〈考察〉

事例 1 では乳幼児の理解を根拠となる行動がはっきりしないまま印象で書いている。また，その感想も誰にともなく問いかけており，自分で考えてみようとする態度がみられない。事例 2 では，「観察をしていて」と抽象的にまとめてしまい，どこから後半の判断をしたのかが明確ではなく，「うまい」という感想のみでまとめてしまっている。

学生にとっては，具体的に観点を設定しそれに沿って観察することが難しいことがわかる。1，2 年生ではこのような根拠の明確でない印象や感想が多くみられる。何となくその場にいて過ごしていることが必ずしも学習しているとは判断できないことを示している。参加の回数を増やしても学生自身の視点が育っていかなければ有効には働かない。自由にかかわる中で得たことを友達と話し合ったり，この利用票を通して指導を受けることで観点の具体化が行われると思われる。

b，事実だけを書く

〈事例 3〉2 年生

今日は 4 ヶ月の女の子とかかわるチャンスがあったので，ずっと近くにいました。その女の子を観察することによって学んだことはたくさんありました。

① 視線が合うことが難しい。

② こちらが声をかけると喃語を話してくる。

③ バビンスキー反射をした。(学生がしたので見ていました)

〈事例 4〉3 年生

- 初めから子どもに近づきすぎず，親と話しながらある程度距離を保っていると，少しずつこちらに興味をもってくれる
- 1 歳 9 ヶ月の男の子が親の問いかけに「やーよ」と応えていた。
- 自分のやりたいこと，好きなことに共感してあげられると子どもが反応を返してくれる。
- 動きがあり，変化するおもちゃが好きで繰り返し楽しんでいた。
- 一点に集中してしまうので，周りにあるおもちゃやお友達とぶつかってケガをしないようよく見ることが大切だと感じた。
- 慣れてきて親から離れて遊んでいても，どこかで必ず親の場所を確認している。
- 声をかけると一生懸命応えようとしてくれる。

〈考察〉

行動レベルで捉え記録している。それぞれが関連なく時間，場所，対象児なども明確ではな

い。しかし，短いながらも自分の情緒的表現を混在せず事実のみを捉えることができるようになってきている。状況を客観的に捉える基本姿勢を身につけつつある状態である。

保育場面では主観的判断で乳幼児を理解することは避けなければならない。乳幼児の状態を適切に把握するためには印象から判断してしまうのではなく，判断材料を収集する必要がありそれが行動観察である。乳幼児の行動に「価値」「評価」を加味せずに純粋に行動として拾うことである。ここではまだ，あちこちで拾った行動を並べているだけであるが，これらの情報を蓄積することで理解が深まることを指導していく必要がある。

c，事実を書き，それについて考察する

〈事例５〉３年生

まずフロアに出て，ござの上で積み玉で遊んでいる２歳児（推定）に声をかけて一緒に遊んだ。側に置いてあったダンボールが気になったのか，それを持ち出した。電車に見立てその中に入り電車ごっこを始めると気に入ってずっと遊んでいた。「おじゃします」とYちゃんが言うので「どうぞ」と中に入れたがずっと「おじゃします」と言っていた。どうやら「入って下さい」のことのようで，中に入ると「出発！」と言って発車した。Yちゃんにとっては「おじゃします」ということばは違う意味で使われていた。

私はことばのその意味だけで考えていたのでYちゃんがどうしたかったのかわかるまで少し戸惑ってしまった。その子なりのことばの意味があるのだと学んだ。

〈事例６〉４年生

子どもが自分の好きなおもちゃで遊んでいる時，他のおもちゃを差し出されてもそちらに移ることはなく自分の選んだおもちゃで遊んでいた。子どもが使っているおもちゃを触り，動きに変化を与えると子どもはとても喜んだ。

子どもの遊びに加わる時は，自分で選んだものを子どもに勧めるのではなく子どもが遊んでいるもに新しい変化を与える方法で関わった方が良いのだろうと思った。また，子どもの遊びや行動も真似したり子どもが自分でやっている行動を取り込んだかかわりが良いだろうと思った。

〈考察〉

子どもとのかかわりを順次書いたエピソード記録の体裁を整えつつある。行動の解釈も含みながら，体験した状況を再現しようとしている。保育者の記録もこのような形態を取ることが多い。しかし，次にはこの事実を自分がどう捉え判断するかということが保育には欠かせない。乳幼児がなぜそのような行動を取ったのか，乳幼児の行動の意味は何か，ということを考察するのである。その点からみると，これらの事例では後半部分に簡単ながら考察が付け加えられている。実習で日誌等を書いた経験を積んだ３年生になると，このような記録がみられるようになる。しかし，個人差が大きく学生の状態を捉えた指導を行っていく必要がある。行動を観察して考察する習慣を身につけるにはある程度習熟も必要であり，３年生は現在のところ利用

数が少ないが利用を奨励して乳幼児を観察し記録する機会を増やす努力をしなければならない。

また，乳幼児の行動の読み取り方を指導することが有効になる状態であると考えられる。状況の記録を通して他の人（友人，教員など）と共有し，それについて話し合うこともできる。行動から判断した自らの読み取りの適切性を学生自身が吟味するためにもこれらの記録に対してのコメントを返していく必要がある。

d，事実を書き，自分の課題を書く。

〈事例 7〉2 年生

私が観察した子は 2 歳の子でした。

行動

- お人形を右手に抱いて，左手に小さなバックを持って買い物に行くかのように外に出たりしていました。
- 外にある小石を拾って投げたり，並べたりして遊んでいました。
- 絵本のヒヨコを見て「ピッピ」や「ピッピいっぱい」と言っていました。
- 私のペンとメモ帳を持って私に渡して「行くよ」と言って外に行こうと誘ってくれました。（以下略）

感想

…（前略）…声をかけても遊びに夢中だったり私に関心を持ってくれず，難しいなと思いました。先輩達はたくさん会話をしていて，次回からは先輩達がどんな風に声かけをしているのか見て，私もまねしてみようと思いました。今日はお母さん達にもインタビューをさせてもらいました。私が質問すると丁寧に色々なことを教えてくれました。とても嬉しかったです。でも，私が何を質問していいか分からなくなってしまいました。次回は，質問する内容を考えていこうと思いました。

〈考察〉

乳幼児の行動は箇条書きで関連性がないが，そこからまとめての感想が別に整理して書かれている。行動に対しての解釈や考察はなく感想レベルであるが，その日経験したことを踏まえて次回の課題を自己設定している。これは大切な態度である。次回の動機付けになると共に，視点を定めて観察できるようになるからである。

保育では，一日の情報をもとに乳幼児の実態を捉え明日の保育のねらいを考える。これは仮説的取り組みでもある。自分の保育に対する自己課題でもある。乳幼児の望ましい姿（ねらい）を想定し援助や環境設定を行うのである。捉えた状況を考察するだけでなく，そこから様々な問題を拾い上げ次の取り組みに継続することが保育なのであるから，自分の問題点を理解し取り組もうとする態度は大切である。このような態度を認め，励ましていくような指導を行う必要がある。まずは課題の良し悪しを問うことよりも自分自身と真摯に向き合おうとする態度を十分に認めていきたい。

保育者は，学級を一人で担任することも多く他の人に保育を観察してもらう機会が少ない。自学自習の習慣を身につけることが必要であるから，このような学生の態度を育てていかなければならないのである。

e，事実を書き，それについて考察し自分の課題を書く。

該当事例なし

〈考察〉

ｃで述べたように短い考察がついた事例はあるが，数が非常に少なくまだ事実を詳細に記録するということが課題の学生が多い。そこから考察すると，ｅに設定したような内容には至っていないのだろう。今後の利用票に注目したい。

VI，まとめと今後の課題

本稿では保育実践研究センター「ふらっと文京」を自由参加で利用した学生の利用票分析を試みた。ふらっと立ち寄り自由に気軽に乳幼児やその保護者とかかわる体験を積んでもらいたいという願いのもとこのような利用形態を企画したが，まだ十分に利用されているとは言い難い状況である。授業で利用しても必ずしもそれがきっかけになるとは言えず今後の動向を見据えながら，繰り返しアピールしたり，利用状況を学生にも周知していくなどの取り組みを必要とする。但し，現在は親子の利用が大変に多く大人の数が収容人数を大幅に超えてしまうこともあるので，ふらっと全体の運営のあり方も含め検討していく必要がある。

学生の利用票を分析すると，行動観察や記録方法の技術技能習得が課題であることが明確になった。授業でどのように取り上げるか，また学生にどのように問題意識を持たせていくかが課題である。利用票も書きっぱなしにしておくのではなく，スタッフが積極的に指導すれば学生の成長に大きく貢献できるだろう。但し，自由参加のため次にいつ来所するかは把握できずふらっと以外の場で指導する場面がないのも現状である。個人指導だけにこだわらない方法を開拓する必要がある。現在も掲示等を行っているがどの程度読んでいるか稼働状況も把握し今後の対策を考えていきたい。

利用票の分析については下位カテゴリーの設定等についても構想しており，更に詳細かつ綿密な分析を試み学生の実態把握及び指導に生かしていきたいと考えている。自由記述文の有効な分析方法を検討していきたい。

【参考文献】

平山許江他　保育実践研究センターにおける活動の意義と内容―１年次：平成16年度の研究活動の報告と成果―　文京学院大学総合研究所紀要第６号
平成16年度 「ふらっと文京」活動報告　保育実践研究センター
平成17年度 「ふらっと文京」活動報告　保育実践研究センター

（2006.12.14受理）